元カルチュラルオリンピアード・クリエイティブプログラマー/ニューハム区役所

～オリンピックにおける文化レガシー～

報告者：前窪義由紀

1　元カルチュラルオリンピアード・クリエイティブプログラマー

（1）概　要

- 北京オリンピックが終わった2008年の９月から４年間のカルチュラル・オリンピアードがスタート。オリンピック本番ではロンドン2012フェスティバルという12週間の大規模な国際芸術祭を開催した。演劇や音楽、ダンス、美術、文学、映画、ファッションなどあらゆる分野にわたる文化イベント総数は約18万件、参加者数は4,340万人、総事業費は220億円。
- ロンドンだけではなくイギリス全土 1,000 カ所以上実施され、アスリートと同じ204の国と地域から４万人以上のアーチストが参加し、5,000以上の新しい作品が生まれた。テーマ「英国の誰もがロンドン五輪に参加するチャンスを提供し、創造性を喚起させること」、ビジョン「一生に一度切り」が掲げられ、アーチストたちの斬新なアイデアが数多く実現した。

（2）説　明　者

カテリーナ　ロリッジオ　氏

Miss Caterina Loriggio

元カルチュラル・オリンピアード・クリエイティブプログラマー、サウスイースト地区担当、シェークスピア劇場グローブ座に所属、３年間国会職員としての経験、現在は屋外イベント中心の活動をしている。

(3)主な説明内容

➢ **オリンピックと文化、サウスイースト地区の活動**

ロンドンオリンピック・パラリンピック(以下オリンピック)の開催のため、オリンピック開発局(ODA)、オリンピック競技大会組織委員会(OCOG)の二つの組織がつくられた。クーベルタン男爵の理念(①スポーツ、②芸術、③教育)に立ち返ったオリンピックの開催をめざし、ネーション(イングランド、スコットランド、ウエールズ、北アイルランド)、リージョン(地方行政区)で、競技、文化プロジェクトが位置付けられた。1948年のロンドンオリンピックでは、裁縫、編み物の競技もあり、金メダルも送られるなど文化も大きな位置を占めていた。1960年代～70年代にかけてスポーツ中心の開催になった。ロンドンは文化都市、組織委員会では、「文化の再生」をテーマに設定、特に若い人たちにカルチャーを対象にした取り組みへの参加を表明した。

オリンピックに関して、①世界を招く、②文化、多様性を重視する、③若者にインスピレーションを与える。この3つを中核的な価値としてレガシー、持続的可能性を位置付けた。今までに一度もなかったことをしようと7つのテーマを設定した。

①聴衆が参加できるようにしよう
②公園など公共の場を活気付けよう
③スポーツと文化を一緒にしよう
④オリ・パラを融合し、勇気、忍耐、価値観を大切にしよう
⑤文化の専門家とコミュニティを共同させよう
⑥若者にインスピレーションを与えよう
⑦就職、就学、学ぶ機会を作ろう

全国で10の巨大プロジェクトを展開してロンドンのフェスティバルで終結した。開・閉会会、聖火リレーなどのセレモニーもあるが、全国では、オリンピックのシンボルマークをすべての自治体に掲げ、小さい島全体をシンボルマークで取り囲むなど盛り上げた。2008年9月、第一回カルチュラル・オリンピアードを開催。1年間に1000回のイベントを行い100万人の参加があった。その後、カウントダウンイベントに名を変え取り組んだ。すべての地域に50万ポンドの予算をつけ、芸術家に依頼して全国で10の巨大なイベントを実施した。

サウスイースト地区は、7つの自治体、800万人が住んでいる。すべての地域でカルチャ

ーを大きくやろうと担当を決めた。地域住民に呼びかけ、思い出のあるいろんな木を集めボートを作ることを提案し、一人の芸術家に予算を渡して依頼した。木を大切にすることをテーマにして、障害者をはじめ誰でも参加できることをコンセプトにしたことで 12,000 人が参加する取り組みとなった。３年間かけた努力で、障害者への見る目が変わったことやアートがわかるスポーツマンが現れるようになるなど、最も大切なレガシーとなった。

サウスイースト地区の取組成果の一つである思い出のある木材で作ったボート

イギリスの大学は、もともと独自性が強く大学間の交流、協力がなかったが、これまでにない稀有な取り組みとして 12 の大学に文化プロジェクトへの協力を求めた。スポーツの歴史、レガッタ、クリケット、ゴルフなどの歴史も大きく宣伝した。オリンピックを使ってローカルなサウスイースト地区のアイデアを実現したいとの思いの取り組みだった。

（4）主な質疑

○　2008 年から取り組まれたイベントについて、ロンドン以外ではどうだったのか。

→　地域によって差があった、サウスイースト地区は、ロンドンに近かったが、北部スコットランドではそれほど盛り上がらなかった。ただ、北部の失業率の高いところでは若者に技能を習得させることに焦点を合わせ文化プロジェクトに取り組んだ。

○　スポーツと文化の協力はどうだったのか。

→　スポーツと文化の協力は大変だった。パラリンピックの選手や障害者アーチストが学校に行き、生い立ちや経験を語ったことは貴重だった。子どもたちがそれをテーマにしたダンスを創作したり、ボートの選手たちが地域の祭りに参加したことなどは盛り上がりを作った。

○　子どもたちや海外のアーチストの参加はどうだったのか。

→　学校では、オリンピックに関して教育プログラム、文化プログラムがつくられたが、文化面の取り組みは少なかった。地域の人たちのダンスグループと一緒に参加するなどのケースは多くあった。フェスティバルは、海外のアーチストの参加も多くあり、イギリスと海外のアーチストの協力も進んだのではないか。

○　これまでのロンドンオリンピックを経験していない若者世代の取り組みはどうか。

→　オリンピックのロゴ、マスコット、文化プログラムの作成に 40 の青年団体と相談しながら一緒に取り組んだ。文化で若者の参加を募ることに注力した。

2 ニューハム区役所

（1）概　要

- オリンピックを期にレガシーとして活用できようにニューハム地区の再生に取り組みグットクオリティーの地区に変貌した。
- 2027 年までの計画で、さらに住民が永住したくなるような魅力的な地区になるように、世界水準の文化施設、劇場、世界最大の博物館の誘致を進める。

（2）説 明 者

ナリンダ　ウ―ビン　氏

(Principal Transport Planner/Newham London)

（3）主な説明内容

➢ オリンピック施設整備、ニューハム地区の再生

オリンピック会場に決まる以前のニューハム地区は、鉄道駅などがあったものの住民が定住せず、すぐに離れてしまい誰もこない地区となっていた。人を引き付ける魅力もなく開発申請をしてもうまくいかなかった。

ロンドンオリンピック、パラリンピック開催が決まり、その開催会場に４つの自治体・区が手を挙げ、ニューハム地区に主な会場の60％が決定された。４か月の検討を経て、レガシーとして活用できるように、また、もっとも大切なこととして地元の人々も使える持続可能性のある施設となるように、オリンピックスタジアム、選手村などの施設が計画された。

実際、オリンピック終了後には、スタジアムは、８万人規模から５万人規模に縮小され、地元のサッカーチーム、ウエストハムのホームグラウンドとなっている。地域、学校も使える施設にしているが、今年の夏に世界陸上も開催された。選手村は、地元住民が使えるように改修され、分譲・賃貸マンションとして満室の状況である。商業施設として、店舗、美容サロン、郵便局などが入り近隣住民に利用されている。

サッカー場に改修中のオリンピックスタジアム

宗教も重要なことから、どんな宗派でも使えるように配慮した教会スペースも造った。選手用のヘルスケア、クリニックも一般利用が出来るようにし、国民健康保険も使える質の高い医療施設となっている。水泳会場も縮小して地域住民、学校のプールとして、エネルギーセンターも地域のセントラルヒーティングとして活用されている。交通の利便の向上のため、ロンドンの中心駅から急行が入る駅に、ユーロスターも乗り入れる国際駅になった。

こうしたことをコンセプトに文化的、教育的関係として整備を進めたことが、カルチュラル・オリンピアードの一番大きかったところだ。また、世界から来た人たちを含め応募者 25 万人の中から 7 万人のボランティアを選んだことや学校、地域文化の活用が力となった。

いま、ニューハム地区は、オリンピックがきっかけになり、グッドクオリティーの地区に変貌してきている。2027年までの計画で、さらに住民が永住したくなるような魅力的な地区に向けて、開発公社を中心として、世界水準の文化施設、劇場、世界最大の博物館などの誘致を進め、2000人の雇用を生み、新たに150万人の来訪者を迎えることが出来るように地区の整備を進めようとしている。

(4)主な質疑

○　なぜ、ワシントンのスミソニアン博物館など世界的な施設が来ることになったのか。

→　大ロンドン市議会、開発公社などが世界中に宣伝をしたことや魅力ある地区に整備したことが要因になったのではないか。

○　オリンピックの準備について、住民参画がどうだったのか。

→　定着している住民はあまり多くなかったが、すべての計画を公表し、住民参加の公式の協議、住民説明会などすべてやった。これはかなり重要なことだった。

3. 所　感

ニューハム地区の再生について、オリンピック・パラリンピック(以下オリンピック)をきっかけにして再開発で生まれ変わったが、「あの辺りは今や普通の人たちが住める場所でなくて若い富裕層が集まるエリアになってしまった。それが良かったのかどうかは議論の分かれるところ」(英紙ガーティアン特派員マッカリー氏)との指摘もある。2020年東京オリンピックに向けても、スタジアム、選手村などに限らずオリピックのために建設される施設の活用や地域の将来構想、レガシーについてしっかりと検討し国民的議論が必要だと感じた。

イギリス人は、日本のように国を上げてのオリンピックの盛り上りはない。カルチュラル・オリンピックの影響ももう一つの感があったが、カルチャーを掲げての取り組みは一定の盛り上げの効果があったとレクチャーされた。私の印象としては、750　万人の人口を持つ大都市ロンドンだが、公園、緑地の面積は市の約　40%を占め、古い建物、住宅、街並みなども保存し長く使っている。文化・芸術面では、ミュージカル、演劇、オペラ、音楽、

美術館、博物館など数多くありイベントも集積している。これらの文化・芸術に触れるため、国内外から多くの人たちが訪れ、ロンドンの魅力に触れて住もうとする人たちも多い。このように長い歴史と市民に息づく文化・芸術面での力が、ロンドンオリンピックの文化レガシーの背景だったのではないかと感じた。

また、オリンピックの財源として、施設整備を含め宝くじから相当支出されたとお聞きした。2008 年当時は労働党政権であり、政府は文化を奨励し予算を増やしていた。しかし、2010　年保守党政権に代わり年々文化予算が減少した。それを補ったのが宝くじによる財源だった。オリンピック以後、カルチュラル・オリンピアードに参加してきた芸術家たちは、確かに仕事量は増えたが予算的支援はされていないとの報告もあった。文化・芸術のすそ野を広げ、誰もが高い水準の文化・芸術に触れ参加できるように支援していくことも、オリンピックを開催する国や地方自治体の役割ではないのかと思う。

1964 年の東京オリンピックは、戦後復興から経済成長にといった共通の思いがあったが、2020 年の東京オリンピックは、人口減少、高齢化が進む「成熟」社会で、かつてのような経済効果を期待することはできない。ロンドンが掲げた文化レガシーは、その後のオリンピックにも影響を与えている。東京オリンピックでも、新たな価値観を生み出すオリンピックの戦略として検討に値するのではないか。また、文化プログラムの実施やレガシーについて、各地域で文化・芸術家、すべての住民が結集できる取り組みが求められる。そんなことを感じた調査だった。